

令和7年度学位記授与式 学長式辞



本日3月11日は、15年前、東日本大震災という未曾有の災害により多くの尊い命が失われた日であります。ここに改めて、犠牲となられた方々に深い哀悼の意を表するとともに、被災されたすべての皆様に心よりお見舞い申し上げます。

医療に携わる者にとって本日は、災害の中で人々の命と健康を守るという使命の重さを改めて考える

日でもあります。この出来事を決して忘れることなく、医療人として社会に向き合う責任を、いま一度胸に刻みたいと思います。

さて、本日ここに、医学科、看護学科、そして大学院博士課程を修了された皆さんに、学位記を授与できますことを、浜松医科大学を代表して心からお祝い申し上げます。

誠におめでとうございます。

また、これまで皆さんを支え、励まし、見守り続けてこられたご家族、ご親族、関係者の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。

卒業される皆さんが、本日この日を迎えることができたのは、多くの方々の支えがあっただけであり、そのことへの感謝の気持ちを、これからも忘れないでください。

本日、医学部医学科・看護学科を卒業される皆さんには、学士の学位が授与されます。

これは、皆さんが本学の教育課程において、医学・看護学に関する専門知識と技能を身につけ、自律的に学び続ける能力、豊かな人間性と高い倫理観、科学的探究心、そして社会に貢献する資質を備えたと認められた証です。卒業する皆さんは、この基準を満たし、晴れて浜松医科大学を卒業されることに誇りを持ってください。

医学科の皆さんの多くは、6年前に入学され、新型コロナウイルス感染症の影響を最も大きく受けながら学生時代を過ごしてきました。

皆さんが本学を目指した入学試験は、感染対策を徹底しながら通常の学力試験



として実施されましたが、入学後の大学生活は、例年とは大きく異なるものでした。

新入生オリエンテーションで恒例となっていた合宿や福祉体験は実施されず、Zoom やグループごとの実施となりました。入学式もグループごとに行われ、保護者の参列は叶いませんでした。本日も参列の保護者の皆様の中には、入学式にご参加いただけなかった方もいらっしゃると思います。

授業もまた大きく変化しました。4月に授業は実施されず、5月から Web 授業が始まりました。後期からは一部対面授業が再開されたものの、完全に対面授業が主体となったのは 2023 年度からでした。



課外活動も大きく制限されました。滋賀医大との交流戦や西日本医科学学生総合体育大会、東海地区国立大学体育大会などの大会は相次いで中止となり、学生として課外活動も楽しみたい時期に十分な活動ができなかったかもしれません。

医大祭も 2020 年度は中止、その後は三密を避けながらの短期

開催と、例年とは異なる形での実施が続きました。私生活においても、アルバイトの自粛や会食の制限など、社会とのつながりを得る機会が制限される状況が続いたと思います。

それでも皆さんは、この困難な状況の中で学び続け、本日この日を迎えました。

看護学科の皆さんもまた、コロナ禍の影響を受けながらの学生生活を送りました。

看護教育において重要な臨地実習や演習にも様々な制約がありましたが、その中で皆さんは、人に寄り添う看護とは何かを考え続け、専門職としての基礎を着実に身につけてこられました。

患者さんに最も近い存在として医療を支える看護職の役割は、これからの医療においてますます重要になります。

不安もあり、先が見通せない状況の中で、考え、工夫し、仲間と支え合いながら学び続けた経験は、これから医師として、また、看護師、保健師、助産師として歩む皆さんにとって、必ず大きな力となることでしょう。

皆さんのこれからの活躍を大いに期待しています。

また大学院博士課程を修了された皆さんは、研究を通じて新たな知見を得、それを論文として世の中に発表されました。自ら抱いたリサーチクエスションの答えを求め、研究を立案・計画し、実行し、結果を分析し、論文という形にまとめるという一連の経験は、将来必



ず大きな糧となります。本学で培った研究の経験や成果を、これからも広く社会に役立てていただきたいと思います。

これから皆さんが進む医療の道には、さまざまな行き先があります。

医師や看護職が不足する地域で医療を支えることも、極めて重要な使命です。地域に寄り添

い、地域医療の核となり、患者さんを支える医療は、日本の医療の基盤を形成します。

また大学病院で医療技術を磨き、高度かつ最先端の医療を実践することも期待される使命です。さらに研究を通じて新しい治療薬や医療技術、医療技術を開発することも、医療人に求められる大きな使命です。

診療と研究は、二者択一の関係ではありません。両者は互いに連携しながら医療を前進させていきます。どうか皆さんには、診療と研究の双方を自らのミッションとして捉え、国際的な視野を持って活躍してほしいと思います。

留学や海外での研究・研修の経験は、自分自身の視野を広げ、日本の医療をさらに発展させる力となります。

昨年、ノーベル化学賞を受賞された北川進先生は、「研究とは、女神の前髪をつかめるかどうかだ」とおっしゃっています。古代ギリシャには「チャンスの神、カイロス」の像があります。その姿は、前髪は長く、後ろには髪がありません。目の前にチャンスの神様が現れたときには前髪をつかむことができますが、通り過ぎてしまうと、もうつかむことはできません。

発見につながる偶然のような出来事が研究の中で現れることがありますが、それを発見へとつなげることができるのは、その意味に気づき、追究する準備ができている人に限られます。

フランスの科学者ルイ・パスツールも“Chance favors the prepared mind.”「チャンスは、準備された心を持つものに訪れる。」と述べています。

皆さんには、日常の医療や研究の中で、気になる疾患や研究テーマを常に意識し、アンテナを高く保ちながら物事を考える習慣を身につけてほしいと思います。

日々学び続け、医療や研究に真摯に向き合う人にこそ、新しい発見や機会が訪れます。

AIが急速に医療の中に入りつつある今、医療にも大きな変化が訪れるでしょう。

だからこそ、人と向き合う中で得られる観察や気づきが、これまで以上に重要になります。

患者さんの声、表情、そして生活の背景を理解する姿勢は、どれほど技術が進歩しても医療の本質であり続けます。

浜松医科大学で学んだことに誇りを持ち、大学で得たさまざまな縁を大切にし、他者を尊重しながら歩んでください。患者さん、共に働く仲間、そして皆さんを支えてくれる家族を尊重し大切にす姿勢こそが、信頼される医療人の基盤となります。

皆さん一人ひとりの歩みが、多くの人々の希望となり、よりよい未来の医療を築いていかれることを心から願っています。

結びにあたり、卒業生の皆さんの前途が希望に満ちたものであることを心より祈念し、学長式辞といたします。

本日は誠にありがとうございます。



令和8年3月11日
浜松医科大学長 渡邊 裕司